となりのとなりの…

１隣（ひととなり）

- THE NEXT -

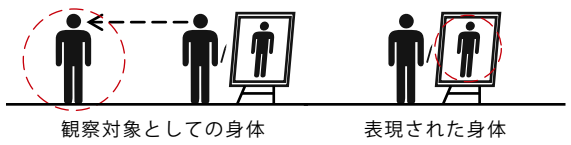
身体と建築を取り結ぶ建築をめざすために

建築と身体は親密な関係にあった。
しかしながら今日、それらの関係が疎遠になっている。
そこで、身体と建築の関係性に注目し、両者の親密性を取り結ぶ建築を設計を行う。
設計に際し、西洋文化と、日本文化の身体観を概観する。
西洋は様式ごとに、日本は近代以前／以降と分けて、それぞれの時代の身体特性を抽出する。
そこで得られた知見を基に、設計を進めてゆく。

表　西洋・日本の身体観の変遷

様式	観察対象としての身体	表現方法としての身体
古代ギリシャ	精神と肉体の複合体	比例関係
ビザンチン・ゴシック	内面精神を映す鏡	身振りの強調
ルネサンス	自然内に存在する法則	思弁的、一点透視的
バロック	行為と心理の表れ	感情の強調
モダニズム	表現された身体	抽象化、単純化
日本（近代以前）	移ろう様子	身の回りのモノ
日本（近代以降）	西洋の身体モデル	抽出された表現方法

□身体観概観
身体表現を行っている芸術作品や、
作品から読み解かれた文化史などから身体観を概観する。
ここでは様式別に２つの視点から考察を行う。
１つは、観察対象としての身体の特性、
２つ目は表現された身体の特性である。

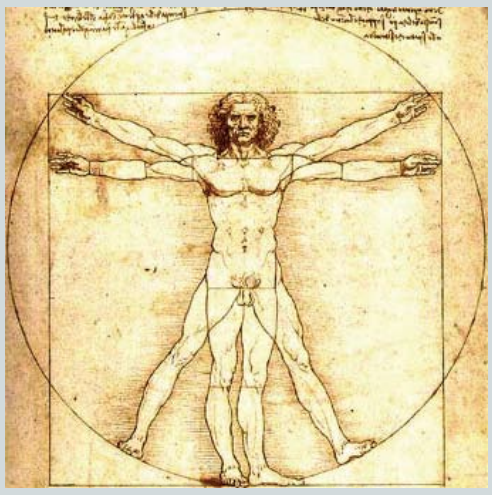


古代ギリシャ

『観察対象としての身体＝精神と肉体の複合体』
精神と肉体は一つであるという感情を持ち、
肉体（＝身体）の中に人間の全体を投影していた。
『表現方法としての身体＝比例関係』
理想形として表現され、それを適える為に比例の原理に当てはめられた。

ロマネスク・ゴシック

『観察対象としての身体＝内面にある精神を映しだす鏡』
身体は道具とみなされ、外的状態よりも内面状況を重視したため、
身体そのものを観察することはなかった。
『表現方法としての身体＝身振りの強調』
祈りの意図を表現。形状の美よりも動きや身振りが強調され描かれている。



ルネサンス

『観察対象としての身体＝自然の中に存在する法則』
束縛されてきた人間らしさが解放され、多くの視点から身体が観察される。
その身体には自然の法則（数学・解剖学・構造・光学・色彩）が存在し
身体を観察する中からそれらを発見・追求した。
『表現方法としての身体＝思弁的、一点透視的』
一点透視などの表現方法などから、思弁的な芸術として完結させる。

バロック

『観察対象としての身体＝行為と心理の表れ』 芸術に心理学が適用され、
行為は心理と肉体の共同作用の結果であると信じられた。
身体形状ではなく、身振りや顔の表情が観察対象となった。
『表現方法としての身体＝感情の強調』
死に対する表現として、衝動や畏怖などの強調された感情が表現された。

モダニズム

『観察対象としての身体＝表現された身体』
パラダイム転換がおこり、
芸術等で表現された身体を観察対象とした。
『表現方法としての身体＝抽象化、単純化』
今までの表現を応用・解体し、
抽象化、単純化された身体が表現された。

□日本の身体観
西洋文化と日本の身体観の差は大きく、
ほとんど理解しえないに違いないと
言われるほどである。 しかしながら、
近代化に伴い日本には西洋文化をベースとした
社会基盤が成り立ち、
かつての日本の身体観は大きく変わった。
そこで、日本の身体観については
近代以前 / 以後に分けて日本の身体観を概観する。

近代以前

観察対象としての身体＝移ろう様子』
かつての日本は、
精神と身体を二分して考えない身体観が底流にあった為、
あえて裸体を取り上げて鑑賞するという視点や発想がなく、
その代わり移ろう様を捉えていた
『表現方法としての身体＝衣装など身の回りのもの』
人物の描写の際は、浮世絵などのように肉体は淡泊な線描写に対し、
衣服や刺青など身体に付随したものが描かれている。

近代以降

『観察対象としての身体＝西洋の身体モデル』
西洋芸術に影響され、
芸術の中で表現された身体を模倣・利用した
絵画や彫刻などが登場する。
『表現方法としての身体＝抽出された表現方法』
近代化以降：西洋の表現方法で、
日本人の身体を表現するため、
慣例的な表現方法を抽出して用いた。

□身体観まとめ
ここで表現方法に着目すると、
表現方法は２種類に大別可能であると考えられる。
１つは身体全体をある１つの視軸でまとめあげて表現する「全体総括的表現」、
１つは身体の部分的なところに着目し拡張して表現する「部分拡張的表現」。
そして、様式を時系列で見ると、
全体総括的⇔部分拡張的の行き来をしていることが解る。（表参照）

部分拡張的表現から建築をつくる

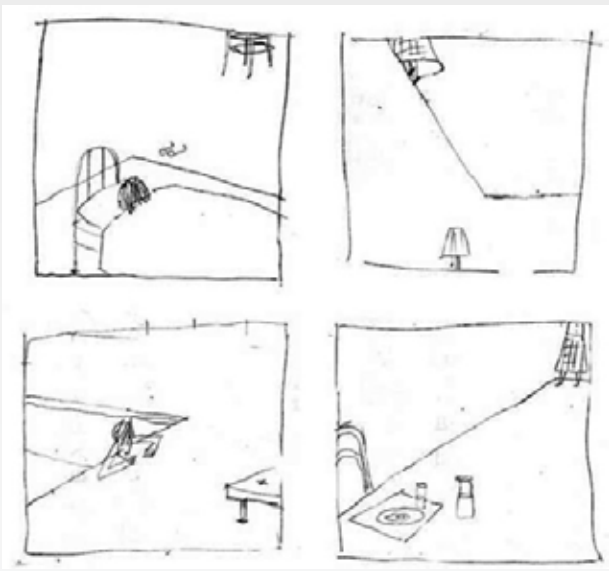
前頁より、「全体総括的」「部分拡張的」の二種類の表現方法を抽出した。
それらを用いて下欄により現代建築を観察すると部分拡張的手法が見られることが解る。
これらのことより、現代では部分拡張的な表現方法による建築設計が有用なのではないかと考えた。
そこで、以降より、部分拡張的表現方法を探索し、設計手法を導き出す。

□　現代建築と身体観

前節で得られた身体表現方法に基づき、現代建築におけるこれら身体観の表現方法を例示する。

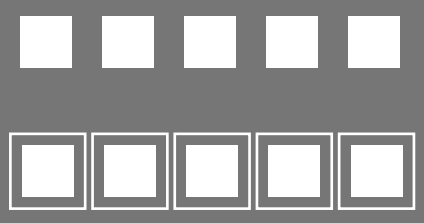
○「HOUSE SH」中村拓志
HOUSE SH は「くぼんだ壁」のある住宅である。
中村は「人と建築の新しい関係」をつくることを目的とし 、
使用者の身体に関する主観的な感情を設計に取り込んだとしている。
このくぼんだ壁は、主観的な感情を拡張的に建築デザインに付加したと考えられる。
○「CSH」平田晃久
ひだのようなものを目で追ううちに、自分の身体がそれに包まれ同化するような体験を元に、平田はひだのような建築をつくる。
この襞という単純な操作の繰り返しは、拡張的表現であると考えられる。
○『２００４』中山英之
建物の躯体から設計するのではなく、椅子や、コップや窓や草などを描きながら、具体的な生活を描き、
生活のシミュレーションを行うことから設計を始めた 。生活という行為からの拡張表現であると考えられる。

→現代建築の共通点
身体観を扱う現代建築において身体の「行為」や「体験」などを部分拡張的表現しているものがあることを確認した。
以上より、身体の表現は、現代建築においては「行為」や「体験」を「部分拡張的表現」が使用されている作品があることを確認した。



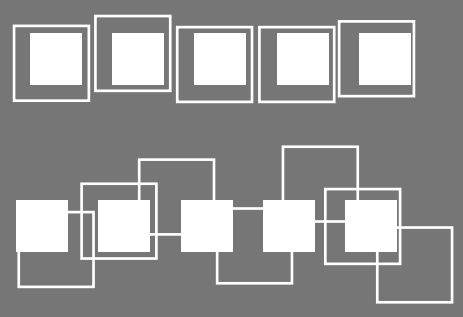
習作

3 つの習作の、「部分拡張的表現」から設計に利用できる手法を模索した。「ずらし」「重なり」をもって、身体が分解されるようにならないだろうか。



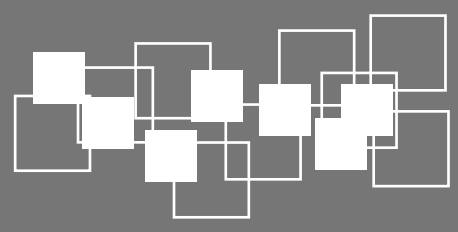
整列されている
（全体総括的）

→



ずらし
かさなり

→



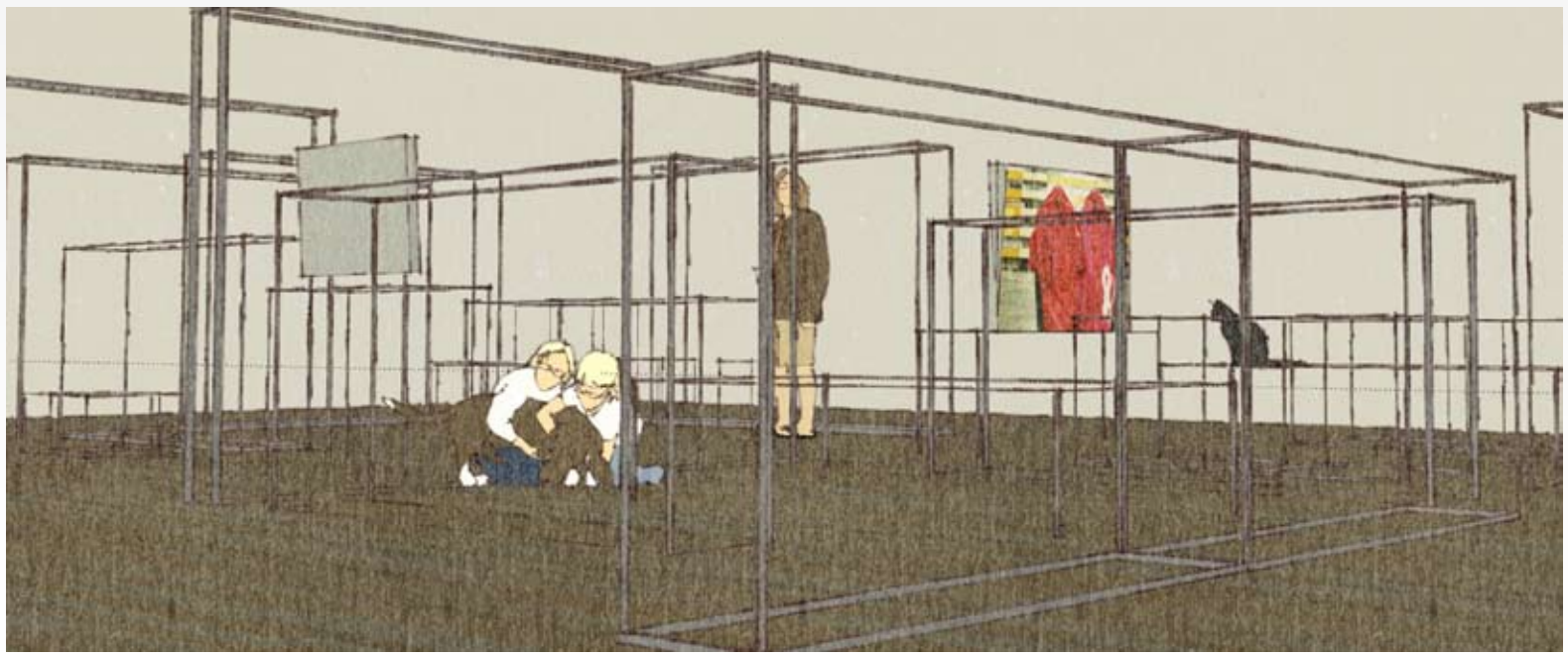
ずらし＋かさなり＝分解
（部分拡張的）

1　めがね　→　ずらし

サングラスの存在感は大きく、
顔の表情とは切り離されて単独化する。
本作品はレンズやグラデーション部分をずらし、
目の外側部分がのぞかせるようにした。
「ずらし」をおこなうことで、
顔とサングラスが互いに関係し合い、
サングラスだけが浮き立つのではなく、
その人の目の動きや表情が強調されるようになる。

2　フレーム　→　かさなり

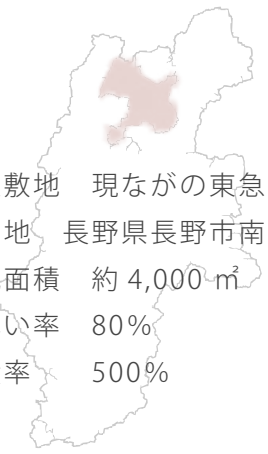
絵画の額は本来、作品を総括的に
まとめ上げるように合わせて掛けられるモノである。
本作品では様々な大きさの額を、
作品の大きさや位置に関係なく「ずらし」、
さらに重ねるように配置させた。
「かさなり」を持たせたことで、
作品がそれ自体で完結するのではなく
鑑賞者の見る視点や見方を拡張させる効果を持つ。
また対象となる作品の内容を
変化・拡張させるような
付加価値をもたらす効果があると考える。



3　家のようなもの
→　ずらし＋重なり

プロジェクト百貨店

近代化に伴い、やってきた建築のひとつ、「百貨店」
利便性や合理性に基づいてつくられる百貨店設計は『全体総括的」であると考える。
その百貨店を「部分拡張的」な設計により、新たな消費空間へと変容させる。



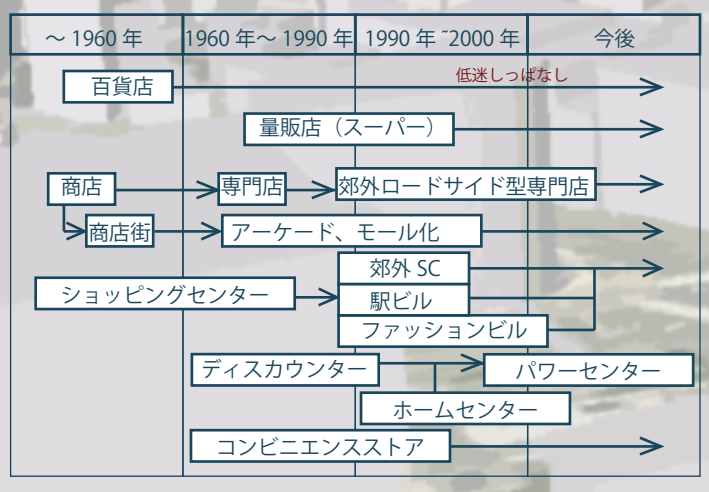
選定敷地　現ながの東急百貨店
所在地　長野県長野市南千歳 1-1-1
敷地面積　約 4,000 ㎡
建ぺい率　80%
容積率　500%

□地方都市中心市街地と、地方都市百貨店

現在、日本中の地方都市中心市街地の衰退が問題になっており、
これまでの「市街地再開発」と「区画整理」に頼った都市再生計画とは
違った方法が求められている。
また、地方市街地活性化に貢献してきた地方百貨店は、
市場縮小や資本提携などの問題もあり、
今までとは異なる業績を上げる為の努力が必要とされている。

□商業業態の変化と百貨店

1904 年に誕生した三越百貨店以来、日本の百貨店は消費生活の最前線で、海外製品をはじめとした生活文化提案型の活動をしてきた。1960 年、都心部の百貨店に加えて、ターミナルには大型百科店が大量に出店した。また、スーパーマーケットという強力な新勢力も出現する。1973 年には、小売業に占める百貨店シェアをスーパーが追い越した。また日本人の価値観の多様化により、多くの業態が登場した。コンビニエンスストアの出現、通信販売、ロードサイド販売、ディスカウントストア、外食チェーンなど、ほとんどがアメリカの流通業の後追いである。
そのなかで、百貨店という業態はずっと低迷し続けている。



□小売店における商品と人との関係性

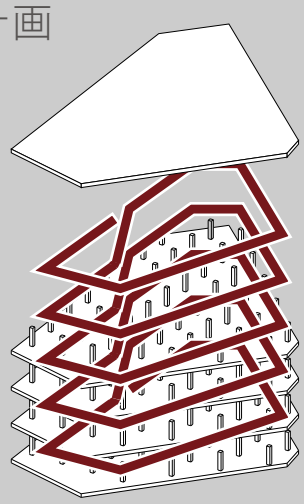
これまでの小売業全体の提案は「商品紹介アピールの為の工夫／集客のための工夫／流通効率の工夫」の３点が主に重要視されてきた。
そこには購入までの出会うきっかけまでしかなく、商品を手に入れた後の商品と人の関係については考えられていない。つまり消費のシステムのなかに主体的な身体は登場していないのではないかと考える。
最近、ネット通販で使用後返品可能制度が出来るものがある。それはとても身体を主体的に扱い、かつ商品も主体的に扱えている良い例だと考える。
そんなような主体的身体を積極的に活用できる空間へと百貨店を変容させることで、商品と人、そしてそれを結ぶ建築としたい。そもそも、試着したり、試食できたりすることのできる場所なので、それを発展させた空間を考えることとなる。ひとりで買うネット通販よりも、沢山人がいて、予想外の比較やよそ見が起こりやすい状況の方が、質のよい消費が行えるのではないかと考える。

つくりかた　その1

整列されている
（全体総括的）

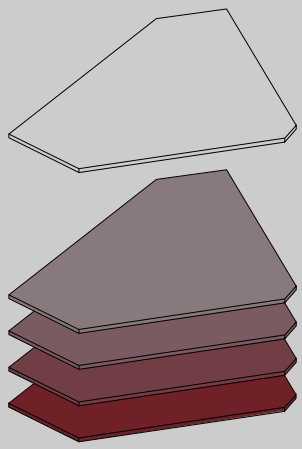
ずらし＋かさなり＝分解
（部分拡張的）

①動線計画



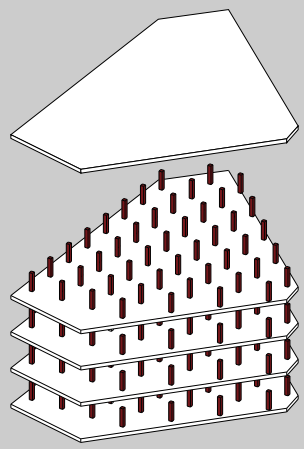
大きく回遊する一本線

②テナント配置計画



ジャンルの水平な区分け

③構造・設備計画



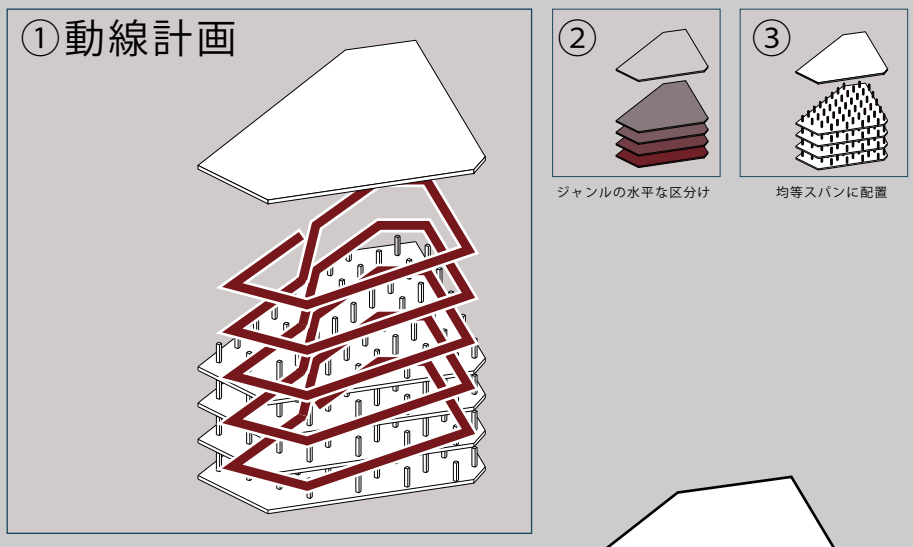
均等スパンに配置

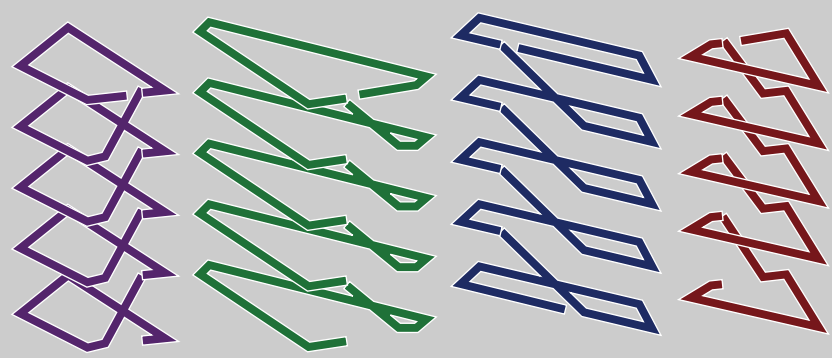
つくりかた　①動線計画

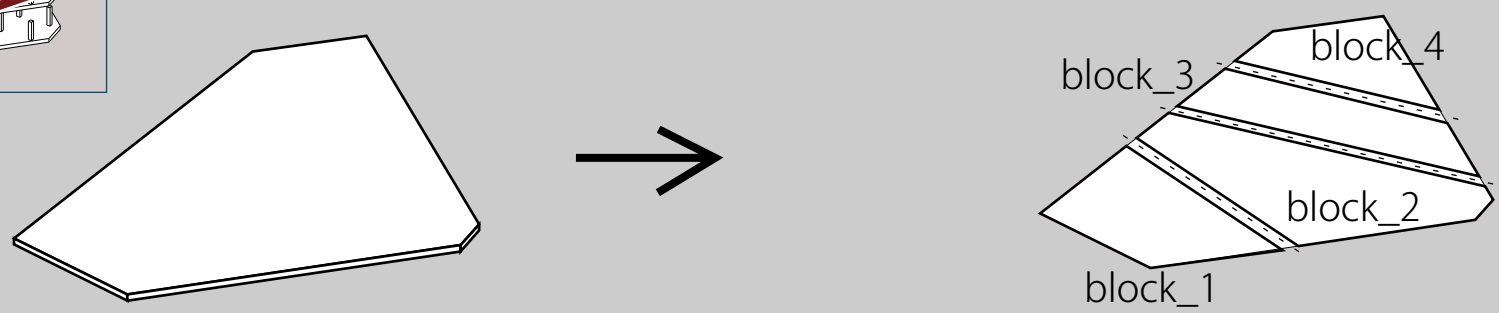
標準計画では、来客が大きく回遊するような通路配置を原則としている。
その際、大きく単調になる動線が、平面・断面構成を総括してしまうため、本設計では動線を 4 つに「ずらし」た。

整列されている
（全体総括的）

ずらし
かさなり





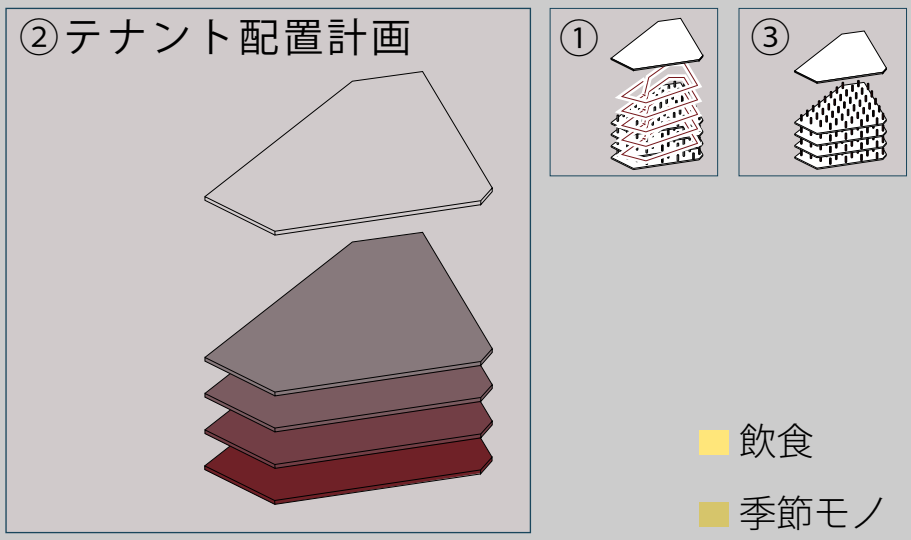


つくりかた　②テナント配置計画

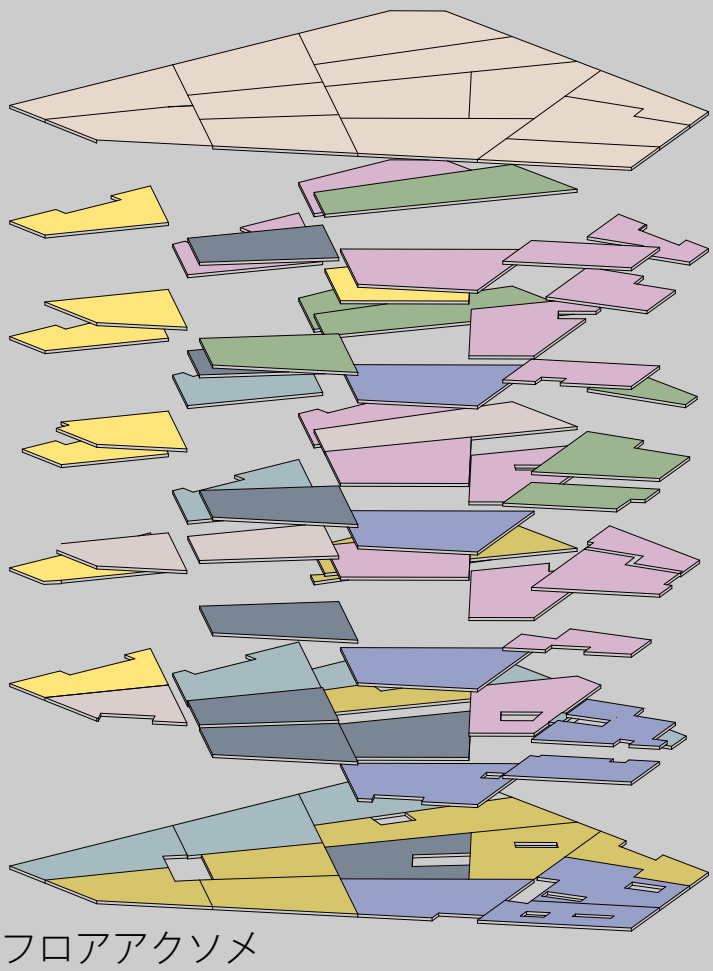
標準計画では、底層、上層、最上階など、階層ごとのジャンル分けが行われ、フロア間の関係性は希薄になる。
そこで本設計では縦割りにジャンル分けを行い、且つ、スキップフロアにすることで、「ずらし・かさなり」を実現する。

整列されている
（全体総括的）

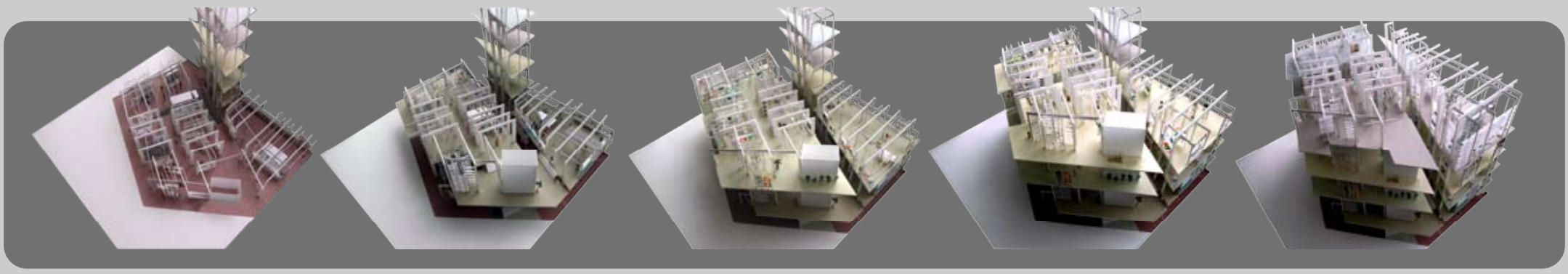
ずらし
かさなり



- 飲食
- 季節モノ
- 雑貨・日用品
- 男性
- 女性若向け
- 女性
- シニア
- ベビー



フロアアクソメ

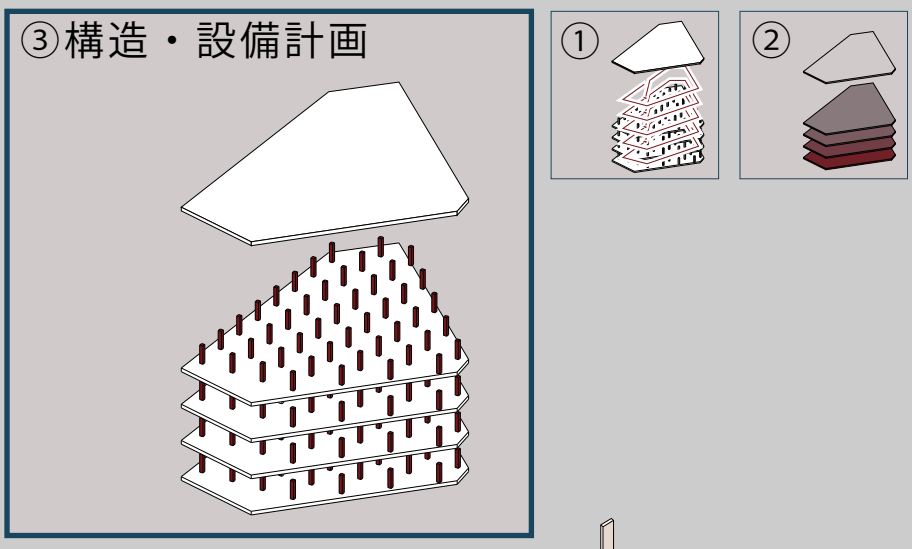


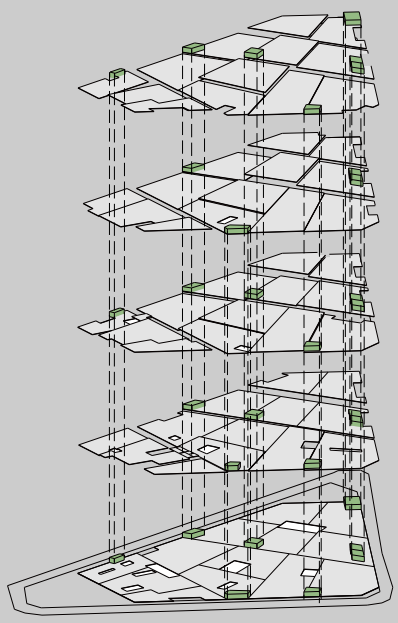
つくりかた　③構造・設備計画

構造は均一なグリッド配置に、設備はある程度固められたコア配置がなされている。
本計画において、
構造は３つのフレームが咬み合うようにし、視界を遮らないようにし、
また設備はファサード面に巡らせ、ルーバー機能を持たせる。
そのように「ずらし」が行われ、細かくなった設備構造は什器化・意匠化され、「かさなり」を持たせることになると考える。

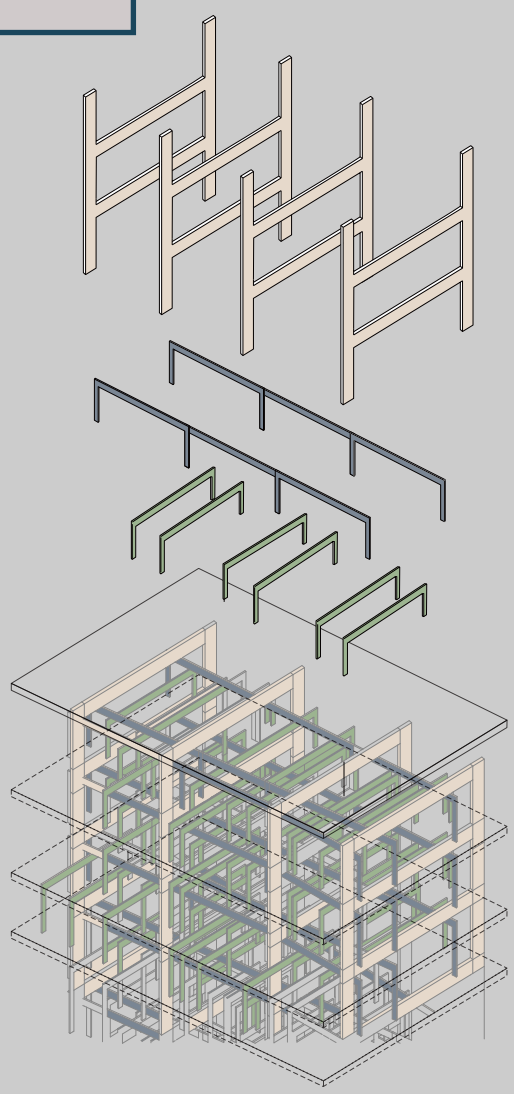
整列されている
（全体総括的）

ずらし
かさなり





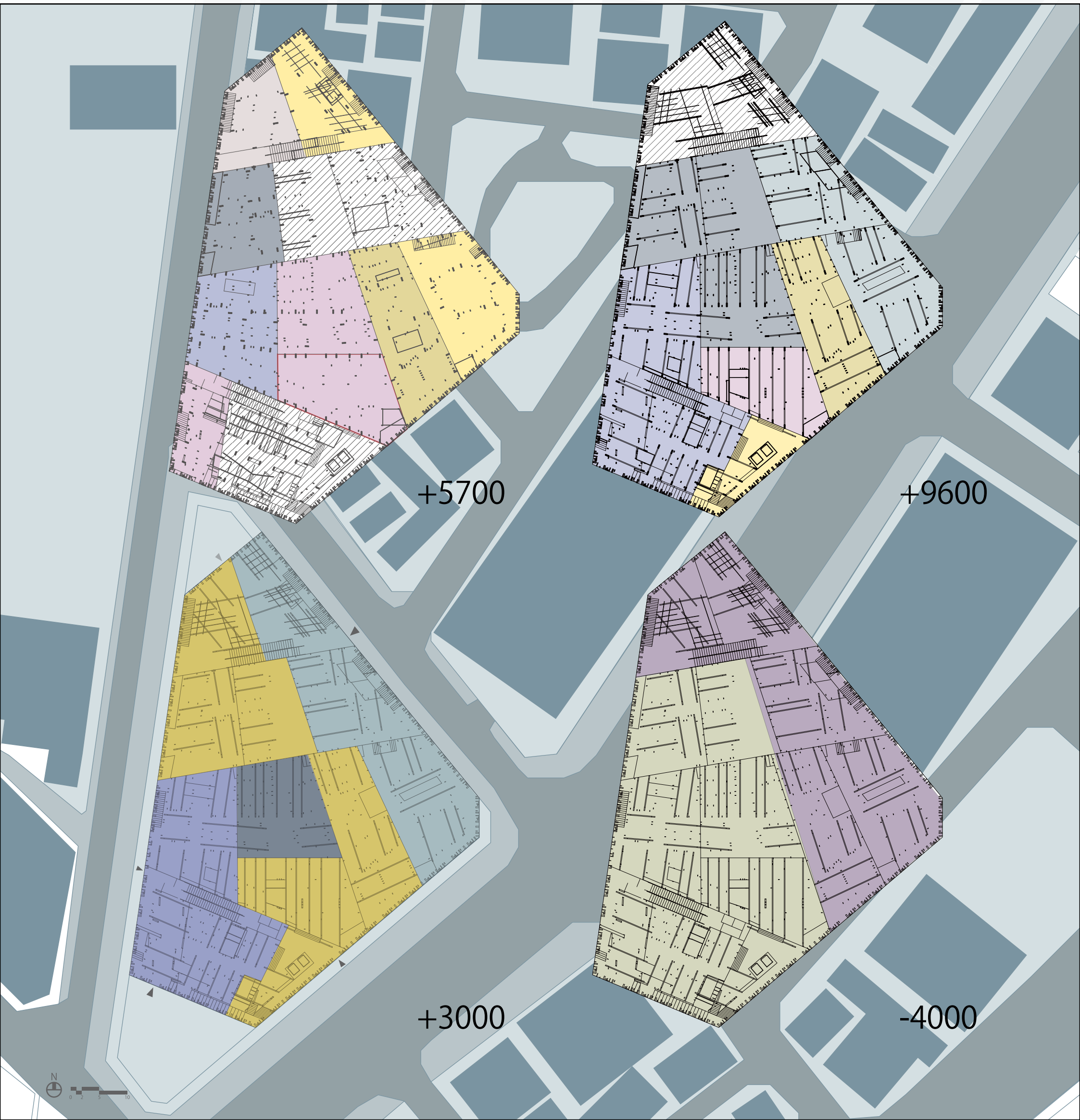
地上設備配置図



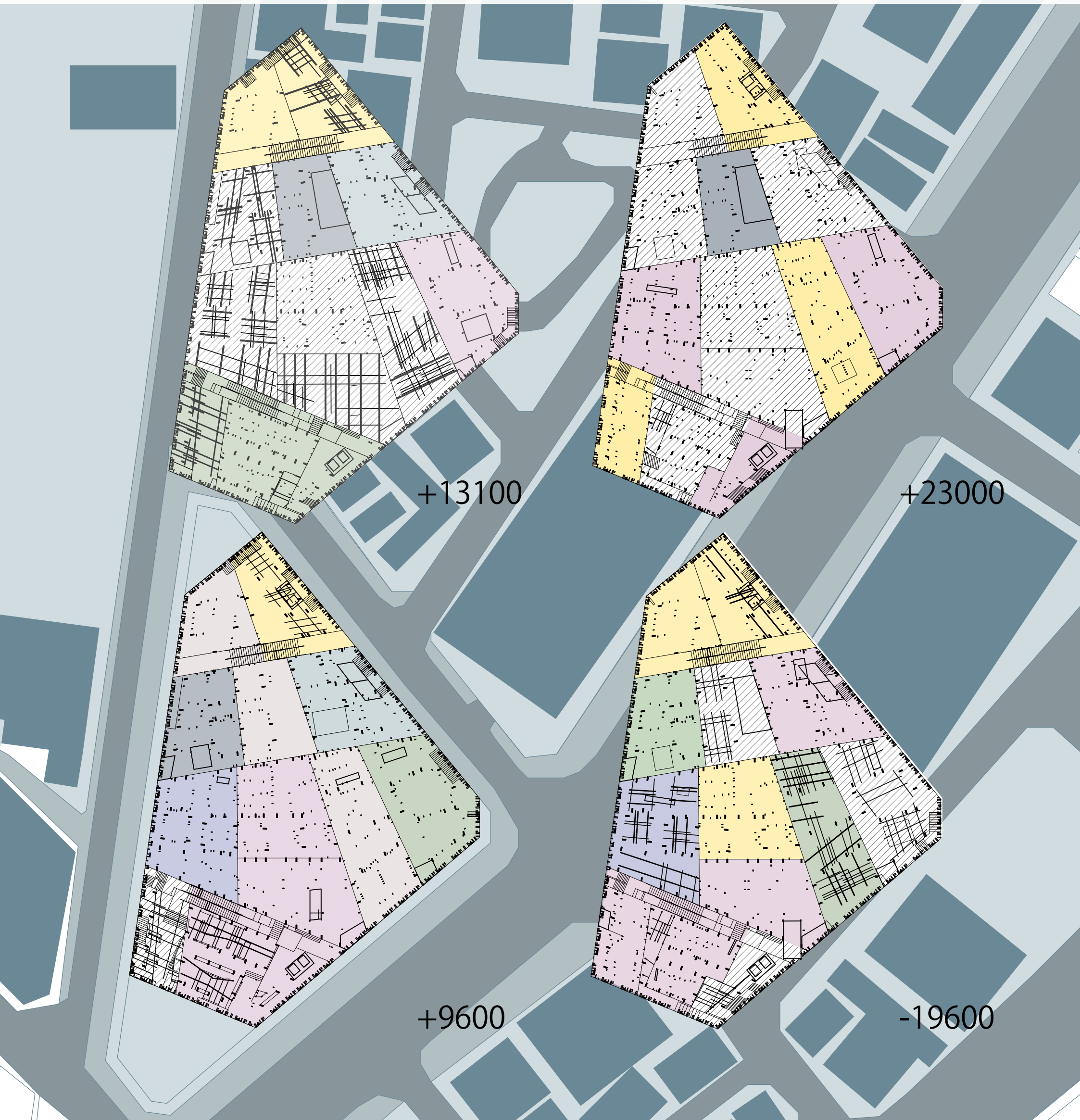
構造体イメージアクソメ

断面アクソメ

PLAN　その１



PLAN　その２



KUDOYA KADAN